

第3学年の取組

(1) 実践内容「人にやさしい町づくり」

① はじめに

福祉実践教室や発表会で学んだことから、高齢者や身体の不自由な人、小さい子たちにもやさしく住みやすい町にするため、自分たちに何ができるのかについて考えた。今までは、子どもたち一人一人が考えたことを、「自分なりに実践していこう」で終わっていたが、今回は、個人の考えをもとに、自分たちができることをグループで話し合い、グループで出されたことをさらにクラスで実践するためにはどのようにすればよいかを具体的に考える高め合いを行った。クラスで出された具体的な提案は、さらに学年で話し合い、より実現可能性の高いことを選び、計画を進めた。クラスから学年へと話し合いや高め合いを行うことで、実践しようという意欲も次第に高まってきた。

このような実践によって、日常的に、「人にやさしい」を心がけ、身体の不自由な人やお年寄りだけでなく、誰に対しても「人にやさしい」実践活動ができるようになってほしいと思う。

② 「人にやさしい町づくりで、自分たちにできることをしよう」

最初に「人にやさしい町づくり」への導入として、ワークシートに「福祉について、知っていることや思いつく言葉」「人にやさしい町ってどんな町か」について考えを書きこみ、話し合いを行うことで、福祉というテーマに取り組んでいくための意欲付けを行った。

そして5月に、福祉に関連した施設である総合福祉会館を見学し、職員の人から福祉に携わる人々の役割や施設の働きなどの説明を受け、お年寄りや身体の不自由な人が利用しやすいように様々な工夫がされていることを知った。介護用の入浴施設を見学し、「寝たきりの人もお風呂に入れてうれしいだろうな」という感想が聞かれたり、「ドアに点々がついているよ」「それは点字だよ」と子ども同士で教え合う姿が見られたりした。そして、福祉のことについてもっと学びたいと意欲をもつことができた。そこで、6月に第1回目の福祉実践教室として、盲導犬の体験を行った。目の不自由な人の擬似体験では、「何かにぶつかりそうでこわかった」「何も見えなくて一歩も歩くことができなくなった」と言っていた子どもたちが、盲導犬といるとそれだけで安心して歩くことができることに気づくことができた。



【総合福祉会館の見学】

また、道路や町の中には、目の不自由な人にとって、危険がいっぱいあることを知った。夏休みには、総合福祉会館の見学や盲導犬の体験で高まった福祉への興味を広げて、身近な町の中にあるバリアフリーについて調べ、車いすが入れる多目的トイレや駅のプラットホームや町の歩道で見かける誘導ブロックなど、たくさんの施設や設備、工夫があることが分かった。10月には第2回目の福祉実践教室を行い、車いす、ガイドヘルプ、手話、点字の4コースに分かれて体験した。車いす教室では簡単に思えた車いすの操作が意外と難しく、子どもたちは体育館の床に引いたマットの小さな段差を超えるだけでも大変だと言うことを実感した。また、耳の不自由な人が一生懸命口を開き、手話を使って話す様子を見て、「身体の不自由な人のために自分も手助けができることがある」と気づいたようであった。11月総合学習発表会では、「人にやさしい町づくり」をテーマに、クラスごとに点字・盲導犬・手話・車いす・バリアフリーなど、自分が興味をもったことを深く調べて発表し、一人一人がいろいろな方法で、自分が知らせたいこと、みんなに知ってほしいことを発信することができた。



【車いす体験】

このような活動をもとに、自分たちに何ができるのかを考え、具体的な方法をクラス・学年で話し合い、高め合って「人にやさしい」活動の実践に結びつけた。



【点字の体験】

③－Ⅰ ESD道徳 主題「自分たちにできる福祉実践」(思いやり・親切)

施設見学、2回の福祉実践教室・身近なバリアフリー探しなど、総合学習で学んできた福祉の活動を通して、誰かに優しくすることや思いやりをもって接することの大切さを理解してきた。しかしながら、思いやりのある行動や親切な行動をしたいと思っても具体的にどんなことがそれにあたるのかは、理解に差がみられた。そこで、「福祉実践＝みんなをしあわせにするための方法」とし、自分の身の回りや地域の人達をしあわせにする方法を考える授業を計画した。

ア 導入の様子 「福祉」の意味の全体での確認

つかむ段階では、これまでの福祉に関係した授業を写真や話を通して振り返り、福祉とは、「みんながしあわせであること」と再度確認した。

イ 展開の様子 「高め合い」に向けての自分の考えの整理

最初に、「しあわせと思うときは、どんなとき」となげかけた。すると、「笑顔になるとき」「うれしいと思うとき」などの意見が出た。児童は、「しあわせ」の意味を理解しているようであった。続いて、対象ごとに「しあわせにする方法」を考えることにした。「自分」を中心に「家族や友達」「学校や近所の人」「町の人・お年寄りや体が不自由な人」と身近な人から範囲を広げて順に考えやすくするため、同心円チャートを用いて整理させた。



【自分の考えの仕分け】

「家でお手伝いをする」「友達と一緒に遊ぶ」「転んだ子がいたら保健室へ連れて行く」「近所の人にはあいさつをする」など具体的な場面を想定した意見が多く出た。ただし、付箋紙にすらすらと書くことができる児童もいれば、自分の考えに自信がもてず、付箋紙への記入が進まない児童もいた。そこで、挙手した児童を指名し、個人の考えを全体で確認させた。こうして、付箋への記入が進んでいない児童にも考えを書きやすくした。

ウ 高め合いの場面 「自分たちでできそうなこと」

「自分たちでもできそうな福祉実践」について小グループでの話し合いをさせた。話し合いを進めていくうちに、児童は、「自分でもできそうなこと」を探すのは、もちろんのこと、自分では、思いつかなかった友達の考えに共感し、「今度してみたい」という思いまで高めることができた。

エ 終末の様子 「福祉実践に通じるのは、思いやりの心」

最後に、「わたしたちの道徳」(読み物教材)を活用し、身近で当たり前のようなことでも十分みんなのしあわせにつながっていることに気付かせた。

オ 授業後の振り返り

「知らないお年寄りに声をかけるのは、なかなかできなかったけれど、今度、電車に乗ったとき、勇気を出して声をかけて席を譲ってみようと思う」など、自分たちができそうなことに気づき、思いやりを身近な福祉実践から始めてみようとする気持ちを一人一人がもつことができた。

③－Ⅱ ESD総合 『人にやさしい町づくり』のために自分たちにできることをしよう

身近な福祉実践から始めてみようという気持ちの高まった児童たちに、「人にやさしい町」にまで視野を広げて具体的な対象を意識して考えさせ、実践できるように話し合い活動の場を設けた。

ア 導入の様子 「町の人達の思いや願いを考える」

対象を「高齢者」「幼児」「障がい者」とし、それぞれの人の立場になって考えること、そして、その方たちに喜ばれるような福祉実践について考えることを確認した。



【対象ごとに各自で考える】

イ 展開の様子 「自分たちで取り組んでみたいことを付箋紙に書き、分類する」

自分たちでできそうで、かつ、みんなで取り組んでみたいボランティア活動にまで視野を広げて各自考えさせた。お年寄りには、「一緒に話をして、元気づけてあげたい」小さい子には、「安心して安全に遊べる公園にしたい」障がい者の方には、「手話や点字を多くの人に知ってもらいたい」など、対象の思いや願いをふまえた考えが多く出された。しかも、道

徳の授業で、実践意欲を高めたためか、付箋紙にすらすら書ける児童が増えた。

その後、小グループになり、今回、三つの立場になって考えるため、Yチャートを用いて整理させた。友達と同じ意見を重ね合わせたり、「募金活動をする」「花を育てる」など対象が複数の場合は境界線上に貼らせたりと、話し合いをしながら自分たちの意見を視覚的に分かりやすく分類するように声かけをした。そして、考えがまとまったら全体発表に向けて、黒板用のYチャートに貼付しても見やすいように、提案したい内容を短冊用紙に大きく書かせた。

児童たちは、前向きな話し合い活動をしながら、グループの考えを共有化しようと積極的に取り組むことができていた。

ウ 高め合いの場面 [他のグループの提案を聞き、より実現可能な提案にするよう、グループで再検討する]

グループの代表者が、黒板のYチャートに整理して貼付し、グループで出た提案意見を報告していった。

その報告を聞きながら、「ぼくたちと同じ」「なるほど」「えっ。それは、ちょっと難しいんじゃない」などグループでの話し合いをもとにした自分の意見をつぶやいている児童もいた。共感できる意見には、うなづきながら聞くことができていた。

その後、「実践可能だと思う提案をどのようにして取り組むとよいか」に視点を変えて、整理した提案の再検討を全体の場で行った。挙手した一部の児童を中心にではあるが、自分たちの提案だけにこだわらず、他のグループの提案に「花の種代を募金で集めたい」「小さい子たちが安心して遊べるために、学区の公園をそうじしたい」など、より具体的に「高め合い」ができた。最後に、次時には学年集会を行い、実践する具体的な福祉実践の決定をするという流れを伝えた。児童は、本時の活動の重要性を実感し、今後もみんなで取り組んでいこうとする意欲をさらに高めることができた。

エ 授業後の振り返り

小グループでの話し合い活動を経て、全体の場での共有化を図ったうえで、再検討を行う「高め合い」の場面を設けたことで、児童は互いの考えを尊重しながらも自分の考えた提案にも自信をもつことができた。そして、学年集会をとっても楽しみにしている姿がみられた。建設的な話し合い活動により、人にやさしい町づくりのために自分たちで協力して福祉実践をしたいという意欲の高まりの表れであると感じた。そして、チャートを付箋紙により整理する活動は、グループ内の話し合いの軌跡が残っているので、話し合いでは、消えてしまった良い意見も復活させることができるのでとてもよいと思った。シンキングツールの活用に教師も児童も慣れていきたい。

④ その後の活動

クラスでの話し合い活動後、出た意見を学年で紹介し合った。そして実現可能か、また、どのように実現させるかについて話し合った。住み良い町づくりとして、町の清掃活動が出た。高齢者に対しては、老人ホームへ訪問し肩もみをしたり、リコーダー演奏を聴かせたりという意見が出た。小さい子たちに対しては、保育園へ訪問し、一緒に遊んだり、ポスターやチラシを作るという意見が出た。

それらを基に、学年を3つに分けた。町の清掃活動は、自分たちの町をきれいにしたいという意見が出た。話し合いの結果、公園や通学路のゴミ拾いをするようになった。



【話し合いながら個々の考えを分類】



【グループで作成したYチャート】



【グループ発表】



【学級全体で提案を再検討】



【学年集会での提案】

老人ホーム訪問は、いくつかのグループに分かれ、マジック、昔の遊び、リコーダー演奏等をデイサービスセンター銀羊苑で行い、高齢者を喜ばせようという意見にまとまった。グループごとに練習をし、2月下旬と3月上旬の2回、訪問することになった。

小さい子たちには、手作りおもちゃをプレゼントすることになった。いくつかのグループに分かれ、すごろく、ビー玉転がし、ぴよんぴよんガエル、魚釣りを作ることになった。すごろくは、学校を紹介できるように、甚ちゃんをコマにし、学校行事などを入れた。また、絵本作りや、学校の紹介ポスターを作るグループもあった。絵本にも本校のオリジナルキャラクター「じんちゃん」が登場した。ポスターでは、新しく入学してくる子のために、学校行事を紹介することになった。小さい子が入学が楽しみになるように、最後はパソコンで手紙を書き、それを添えてプレゼントしたいと考えた。



【おもちゃ作りの様子】

(2) 実践の成果と課題

福祉に関連した公共施設である「総合福祉会館」の見学では、「身体の不自由な人にとって、安心して使える施設なんだ」ということが分かり、福祉という言葉が少し身近に感じられた。福祉実践教室では、点字、車いす、手話、ガイドヘルプの4つのグループに分かれ、身体が不自由な人の実態や生活の工夫について、体験的に学んだが、この講座で、お年寄りや身体の不自由な人のバリアに気づき、「どうしたら全ての人にとってやさしい町になるか」「自分にできることは何か」を考えるきっかけになった。総合学習発表会では、一人一人がいろいろな方法で、自分が今知らせたこと、みんなに知ってほしいことが発信できた。その後の人との関わりの活動では、子どもたちの福祉への興味関心の高まりを受けて、「人にやさしい町づくり」のために自分たちに何ができるのか考えたことをクラスの中で話し合い、具体的にどのような方法で行うか学年集会で話し合い、3つの実践活動を決めたことは、本年度の成果だった。その中の1つ「銀羊苑」の訪問は、以前は教師の側が計画し、行ってきたため、子どもたちにとって受け身的なものになってしまっていた。今回は子どもたちの話し合いの中で行いたいとの気持ちが高まり訪問を決めた。お年寄りとの交流の方法も具体的に子どもたちで話し合い進めていったことは、高め合いの成果であったと言える。しかし、今回は時間的なことから、クラスや学年の話し合いをまとめるときに多数決で行ってしまったが、もっと時間をかけて話し合い、みんなが納得して決めることができるようにしていかなければならないと思う。